英語教育一貫カリキュラムの開発に向けて

早期英語教育実践は世界的傾向ですが、わが国においても、小学校における外国語活動が「やっと」本格実施されることになりました。この本格実施を前に、着実に前進する手立てを具体的に講ずる必要があります。少なくとも5年先、10 年先にどのような教育現実になっていることを描くのか、そのためには今から何を積み上げてゆくべきでしょうか。

基本的には、地域から世界に発信していく「ローバル社会人」を目指して、英語教育に関する教員養成・研修、カリキュラム・教材などの開発が早急に進められねばなりません。その際に大切なことは、小学校からスタートするとすれば、中学・高校・大学・生涯へのライフサイクルの中に位置づけた開発研究とするということです。いわゆる「一貫英語教育システム」の確立への努力です。小学校での外国語活動は「どこから」「どのように」「どこまで」を分担し、中学校にどのように繋いで高校以降へと次々にバトンタッチするかです。その一貫した目標・学力内容・教授システムの確立が急務です。

小学校における外国語活動の目標は、

「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」

です。この目標をいかに具体化して中学校以降の英語教育へと繋いでいくかを、キッズからシニアまでの生涯学習体系の中に位置づけた「一貫英語教育システム」を開発していきたいと願っています。

この開発研究に際しては、新たな地域創生を目指すNPO法人「連塾」の活動として位置づけ、英語教育を通しての地域創生のための研究として積み上げたいと願っています。NPO法人「連塾」の会員及び会員から推薦された方々によって、共に勉強しながら、望ましい教育システムづくりを進めていこうと思っています。具体的にどのような研究会にするのか、組織・活動内容・会費などについては、第 1 回の会合の際に皆さんのご意見をお聞きしながら決めたいと思っています。

英語教育に関心をお持ちの方であればどなたでも入っていただけるよう「敷居」は低く、「志」は高く掲げて、皆さん、協働しましょう！

平成 20 年 7 月

NPO法人「連塾」理事長　　松畑　熙一

英語教育一貫カリキュラムの開発（構想案）

松畑 熙一

1. 基本理念

① 「教育県岡山」を実質化すべく、英語教育を中心に教育全般の「一貫教育カリキュラム」を開発し、岡山から発信する「地域創生学：吉備学」のコアを形成する。

（参考：『「岡山の創造」教育へ、学校と社会の協働と交流』、2003年、「高等学校の新しい構想づくり懇話会」、岡山県教育委員会）

② 小学校から大学までの学校英語教育を中心として、広くキッズからシニアまでの生涯英語教育カリキュラムである「一貫英語教育カリキュラム」を開発する。

③ 「一貫英語教育カリキュラム」は、英語学習の目標・内容・方法・評価について、学校種間の連結による「ナショナル・スタンダーズ」に基づいて、各ライフ・ステージに合った教育展開を実現することを目指したものである。

④ 「生きた言葉」を中核とした人間・文化・自然の共生、「知性・感性・体性・命（霊）性の連性」、及び学習者の個性と地域社会の特性を基盤にした人間形成プログラムで、英語学習を通しての「英語を使える地域発信型国際人」としての言語的・精神的・社会的・文化的発達プロセスを明らかにする。

⑤ 地域に根ざし、地域から世界に発信するための英語教育となるよう、各学習段階における目標・内容・方法・評価を具体化し、「ローバル社会」に生きる日本人に望まれる「ライフ・スタイル」ー「コミュニケーション・スタイル」ー「ランゲージ・スタイル」の確立を目指す。

⑥ 各ライフ・ステージにおける英語学習において望まれる「異文化コミュニケーション能力」育成のための達成目標・学習内容・学習方法をレベル別に示し、「英語教育人間学」を創る。

（拙著、『英語教育人間学の展開』、開隆堂、2002）

⑦ 本プログラムにおける各達成目標・学習内容・学習方法は、次の3種類の下位システムからなるトータル・システムを成すものである。

1） すべての学習者に必須的な「コア学習システム」
2） コアからの「発展学習システム」
3） 前段階の補充・進化を目指す「スパイラル学習システム」

⑧ 「小ー中ー高ー大ー社会（生涯）」のつながりをスムースにするため、「小ー中」、「中ー高」、「高ー大」、「大ー社会（生涯）」の4種類の「連結教育プログラム」を開発する。

⑨ 英語教育トータル・システムは、「一斉・グループ学習方式」と「自己学習方式」のいずれでも進めることができるよう、学習診断・評価システムを具体化する。

⑩ 各ライス・ステージ別の終了要件を明確にして、「一般資格」(General Certificate)取得のための統一的資格試験を行う。

⑪ 学習内容・教材及び指導者については、 地域密着型とし、「地域創生学：瀬戸内・岡山学」を基盤とした地域リーダー、地域発信型国際人の育成を目指す。

2.「新学習指導要領」の概要

(1)小学校

第４章　外国語活動

第１　目標

外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。

第２　内容

〔第５学年及び第６学年〕

外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう，次の事項について指導する。

(1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
(2) 積極的に外国語を聞いたり，話したりすること。
(3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。
日本と外国の言語や文化について，体験的に理解を深めることができるよう，次の事項について指導する。
(1)外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
(2)日本と外国との生活，習慣，行事などの違いを知り，多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
(3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し，文化等に対する理解を深めること。

(2)中学校
第1 目標
外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。
第2 各言語の目標及び内容等
1 目標
(1) 初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
(2) 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
(3) 英語を読むことに慣れ親しみ，初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
(4) 英語で書くことに慣れ親しみ，初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

(3)高等学校 (現行)
第1款 目標
外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

3. コミュニケーション能力と基礎・基本
(1)英語コミュニケーション能力の基本的機能
英語コミュニケーション能力の基本的機能は、次の5点にまとめることができる。
①言語使用を中核にした能力である。
コミュニケーション能力の中心は、ことばを具体的なコミュニケーションの場面で使うことができる力である。理解力と表現力とが一体化して運用力(performance)にまで高まった力である。
②統合的能力である。
発音・語彙・文法などが統合化され、コミュニケーションの手段になった力である。
③音声面が優先された能力である。
音声面の活動を優先して、文字面の活動で強化・発展するプロセスをたどる力である。
④'Task-oriented'な能力である。
ことばは何らかの目的のために使われる。何の目的で、どのような課題解決のためにことばが使われるかを重視した'task'遂行を基盤にしている。
⑤メッセージを中心に発話意図と言語表現が一体化した能力である。
ことばによるコミュニケーションは、「場面－表現内容(メッセージ)－表現形式」のつながりが核になった活動である。
今までの英語教育は、端的に言って、「これを何と言うか」の英語教育であった。今後は、「こんなときどう言うか」を中心とした英語教育に転換しなければならない。

今までの英語教育	これからの英語教育
「これを何と言うか」中心 (表現形式中心)	「こんなときどう言うか」中心 (メッセージ中心:場面－機能のつながり中心)

(例)「ちょっと待ってください」の英語は？	(例)「相手にしばらく待ってほしいとき」何というか？

メッセージを中核にして，場面と表現形式が有機的につながったものである。言語の使用場面や働きを重視すると言うよりもむしろ、「何を言いたいか」のメッセージを中核にするということが重視されねばならない。

(2) 基本的学力とコミュニケーション能力の両立

英語の基本的学力とコミュニケーション能力の育成とをいかに両立させるかが、21 世紀英語教育の最大の課題である。英語の発音・語彙・文法を中心として、英語の理解力・表現力の基礎をしっかり養うことが英語授業の核とならねばならない。その上に立って、生徒の学習負担を出来るだけ軽減し、生きる力につながるコミュニケーション能力の基礎を培うことでなければならない。

授業の多くがゲームや日常会話のやりとりなどに流れてゆくと、基本的英語学力は育ちにくい。英語力の基礎・基本をきちんとつけることを通して、コミュニケーションに生きた英語力が育てられねばならない。

基本的英語学力とコミュニケーション能力の基礎とが両立するためには、主として次の方策をとるようにすべきである。

①「学習のめあて」・学び方の重視

生徒一人ひとりの自主的な学びを育てることが英語授業の基盤でなければならない。英語を学ぶ意義・面白さ・喜びを実感しながら、具体的な学び方をつかんで英語学習を習慣化する努力が必要である。そのためには、学習目標を明確にすることが重要である。教科書においても、各課・各セクションで学ぶ目標を「学習のめあて」として示し、生徒が進んで学習しようとする態度を育てることが重視されねばならない。英語学習への意欲と学習目標と学習内容・方法とがうまくつながり合ってゆくように十分な配慮をすることになる。

②魅力的題材によるメッセージ中心

英語学習のコアは題材であり、表現内容としてのメッセージである。生徒にとって魅力的な題材によって英語学習への興味・意欲づけが図られる。題材内容については、身近な日常性とグローバルな観点からの地球市民性との両立(「ローバル社会」の実現)が目指されねばならない。また、他者への思いやり、平和と共生などへの関心を深め、インターネットなどの活用による異文化相互理解に基づいて行動する地球市民育成への観点が重視されることになる。

③新しい基礎・基本の確立

今までは、英語の基礎・基本は、発音・文法・語彙の言語材料を基盤とした基本的能力であると考えられることが多かった。このような英語構成要素を中心とする考え方よりもむしろ、英語コミュニケーション能力の基礎・基本として考えるべきである。英語がどのような場面でどのように使われるものであるかの基本をつかむことが重視されねばならない。たとえば、一つの疑問文が、情報を得るための質問ではなく、依頼や勧誘の意味で使われる場合もある。このように、英語表現の生きて働く姿の基本をつかむ努力が重要である。

④聞くこと・話すことの重視

コミュニケーションの基本は音声である。音声を優先した学力育成が重視されねばならない。文字を優先すると、どうしても文字を音声化する練習に終始することになりやすい。音声と文字は基本的に異なるものであるという認識に立って指導がすすめられねばならない。

聞くこと・話すことを重視した課(L-S Programs)、四技能の調和的発展をめざす課、読む力を重視した課というように、重点の置き方を変えながらも、できるだけ音声重視が進められねばならない。

⑤学習内容のコアとその拡大

基本的な英語コミュニケーション能力を育成し、その力をコアとして、いかに発展するかの道筋を明確にしなければならない。コアとなる学力をきちんとつけ、必要に応じて多様に補充・発展できるような教材構成が必要となる。

単語についても、指定語 100 語をコアとしてどのように約 900 語へと発展してゆくかの道筋を示すことが必須である。基本的英語学力というコアからの遠心的拡大が図られねばならないのである。

＊『初・中等学校教育課程部分修正告示』(韓国教育人的資源部2006)

1. 目標

日常生活に必要な英語を理解し、使うことができる基本的な意思疎通能力を培う。同時に、外国文化を「正しく理解して韓国文化を発展させ、外国に紹介することができる基礎を築く。このために

第1に、生涯学習者として英語に対する持続的な興味と自信を得る基礎を築く。

第2に、日常生活と一般的な話題に関して意思疎通することができる基本能力を培う。

第3に、外国の多様な情報を理解し、これを活用できる能力を培う。

第4に、外国文化を理解することにより、韓国文化を新たに認識し、正しい価値観を養う。

初等英語は英語に対する興味と関心を持ち、日常生活で使う基礎的な英語を理解して表現する能力を培うことを目標とする。

a. 英語に対して興味と関心を持つ。
b. 基礎的な英語使用に対する自信を持つ。
c. 日常生活のなかで英語で基礎的な意思疎通ができる基礎を築く。
d. 英語学習を通じて他国の習慣や文化を理解する。

中学校英語は初等学校で学んだ英語を基礎として、日常生活と一般的な主題に関して基本的な英語を理解して表現できる能力を培うことを目標とする。

a. 英語で意思疎通することに対する必要性を認識する。
b. 日常生活と一般的な主題に関して効果的に意思疎通をする。
c. 英語になった外国の多様な情報を理解し、これを活用する。
d. 英語学習を通じて多様な文化を理解し、韓国文化を英語で紹介する。

2. 内容

(1)内容体系

a. 言語機能

聴解、会話、読解、筆記の言語4技能を漸進的に涵養するようにする。あわせて、4技能を統合的に使うことができる能力を培うようにする。

b. 意思疎通活動

意思疎通活動は、音声言語活動と文字言語活動からなる。

意思疎通活動	内　　容
音声言語活動	音声言語活動については[別表2]の意思疎通機能と例文に提示された項目を参考 「意思疎通機能と例文」のうち、学年別達成基準を達成するのに必要なものを使用
文字言語活動	文字言語活動については[別表2]に提示された項目とともに[別表4]の「意思疎通に必要な言語形式」に提示された項目を参考

c. 言語材料

自然な言語活動のために、以下の素材、言語、語彙、単一文章の長さを参考とする。

領域	内　　容
素材	[別表1]の素材を参照し、適切なものを選択して使用 児童・生徒の興味、必要、認知的水準などを考慮して、学習意欲を誘発できる内容 主題、状況、課題などを考慮した内容 相互作用に適合した内容 英語圏および非英語圏の文化の理解に適合した内容
言語	初等学校では音声言語中心とし、文字言語の補助手段として使用 自然な言語習得と実際的な意思疎通活動に役立つ言語 日常生活で多く使われる言語 認知的名水準を考慮した言語 音声と文字の関係、音声と意味の識別、ことばの連結、ことばの速度に伴う音韻変化、状況

	による音韻変化、および自然な発話などに役立つ言語
語彙	各学年で使用できる新しい語彙の数は次の通り 3 学年:110 単語以内 4 学年:120 単語以内 5 学年:130 単語以内 6 学年:140 単語以内 （累計:500 単語以内） 7 学年:170 単語以内 8 学年:280 単語以内 9 学年:390 単語以内 10 学年:450 単語以内 （累計:1290 単語以内） （総計:1790 単語以内）
1 文の長さ	3、4 学年:7単語以内 5、6 学年:9単語以内 （ただし、and, but, or を使用する場合は例外とする）

（2）達成基準

＜初等学校　3 年生＞

—聴解—

（1）英語のアクセント、リズム、イントネーションを聞いて識別する。
（2）身近な馴染みのある単語を聞いて、その対象がわかる。
（3）あいさつのような平易な慣用的表現を理解する。
（4）1文からなる簡単な指示、命令に従って行動する。
（5）1文を聞いて該当する絵を探す。
（6）短く平易な内容のチャンツや歌を聞いて理解する。
（7）平易で簡単なゲームや遊びの内容を聞いて理解する。
（8）個人の日常生活に関する平易で基礎的な対話を聞いて理解する。

—会話—

（1）英語のアクセント、リズム、イントネーションに合わせて話す。
（2）身近な馴染みのある対象の名称を言う。
（3）あいさつのような慣用的表現を言う。
（4）実物や絵を見て単語または1文で言う。
（5）個人の日常生活に関して平易で簡単な表現で尋ね、返事をする。
（6）短くて平易な内容のチャンツや歌をまねる。
（7）平易で簡単なゲームや遊びに参加する。

—読解—

（1）アルファベットの印刷体の大小文字を識別する。
（2）絵、実物、動物などを通じて平易で簡単な単語を識別する。

＜初等学校4年生＞

—聴解—

（1）日常生活に関する簡単な対話を聞いて理解する。
（2）身近な事物と人に関する平易で簡単な説明を聞いて理解する。
（3）1，2文からなる指示、命令を聞いて行動する。
（4）平易で簡単な対話を聞いて。対話が起きた場所と時間などが分かる。
（5）平易で簡単なロールプレイイングの内容を理解する。
（6）平易で明瞭な説明を聞き、単純な課題に取り組む。

—会話—

＊金沢市

小中一貫英語教育カリキュラム＆指導体制

※下記カリキュラムは、平成 18 年度からの完全実施を予定しています。

学年	教科書等	指導内容	目指す英語力	標準指導時間（年間）	備考	指導体制
小学1年 小学2年		【第1期】聞く・話すを中心にした指導	＊英語の音に慣れ親しみ簡単なあいさつができる	10		**学級担任** スクールサポーター等で外国人講師を活用し、自然な英語にふれる機会を設ける
小学3年	・金沢版小学校英語副読本1		＊身の回りのものを英語で言え、簡単な自己紹介ができる	35＋α	※α はショートタイムでの指導時間	**学級担任と指導講師等** 小学校英語指導講師等や ALT（外国語指導助手）によるティームティーチング
小学4年	・金沢版小学校英語副読本1 ・金沢版小学校英語副読本2					
小学5年	・金沢版小学校英語副読本2	【第2期】聞く・話すを重視し読む・書くを段階的に指導	＊身近な人の紹介や簡単な文を読んだり書いたりできる			
小学6年	・中1用教科書		＊中学1年の前期程度の学力			
中学1年	・中1用教科書 ・中2用教科書 （中学校金沢文化発信副読本）	【第3期】聞く・話すを読む・書くにつなげる指導	＊中学2年の前期程度の学力	140（＋α）	※α は選択教科「英語」での指導時間	**英語教員** 必修英語および選択教科「英語」を担当 ALT（外国語指導助手） 必修英語および選択教科「英語」で英語教員とのティームティーチング **中学校英語指導講師** 選択教科「英語」および生徒の学習状況に応じた補充指導など
中学2年	・中2用教科書 ・中3用教科書 （中学校金沢文化発信副読本）		＊中学3年の後期程度の学力			
中学3年	・中3用教科書 ・4技能指導のための教材 （中学校金沢文化発信副読本）	【第4期】聞く・話す・読む・書くのバランスのとれた4技能指導	＊			